

棒倒し

太平洋戦争も終わりに近い頃のことだった。今は二〇〇万の人口にふくれあがっている製鉄と石炭産地の大工業都市、本溪市(旧満州国遼寧省本溪湖市)にあった日本人学校の暑い夏の体育の時間のことだ。

このところずーと「棒倒し」の種目をやらされている。四年生だった私の担任は「これは海軍兵学校の競技である。君達も海兵の生徒のように敢闘精神を大いに鍛えてほしい」といった。

たくさんの級友が棒を支えて立ち、そのまわりに敵が棒を倒そうと飛び掛かってくるのを払いのける役が固めている。私の役回りはいつも棒の一番下を抱えている役だ。積み重なる級友の重さに耐え、汗を流しながらゲームの進行状況もわからず、ただただ棒にしがみつくだ。わかっていることは私が首がおれそうになっても棒の下を抱え込んで放さなければ、棒の下がいまだ地面についているということ。で負けの宣告は出せないのである。はんべそをかきながらであるが、ともかく私はわがチームの勝利に貢献できた。

幼い頃から泣き虫で、気の弱い私が棒を倒すという派手な戦闘場面では手も足もでないことを担任は見抜いていたのだろう。

修身の(今の道徳)時間になった。担任は私を教卓の脇にたたせて曰く、「彼こそ敢闘精神の見本だ。これは将来の特攻隊の候補である」とほめた。

その日、意気揚々と家にかえってきた私は母にそのことをとくとくと語った。母はほめなかった。悲しそうな顔をしていたように思う。とても不満だったのをいまでも覚えている。

第二次世界大戦における海軍兵学校や特別攻撃隊の役割を歴史で学んだいま、当時の母の思いもわかるのだが、担任が私に棒倒しの棒の一番下を持たせた意味の深さを私はこの半世紀をこえる歲月の中で理解できるようになってきた。

人生には離してはいけない大事なことがある。そのことを苦勞を重ねながら抱え込んだ人達は困難に耐えて、周囲の思惑に一喜一憂しないでその気持ちを守り続けている。一人一人の能力は決して高くなく、その守備範囲も広くはないが、その人達の力の総和が社会の発展を底支えていることを忘れられないようにしたい。(は)